
「苗字のない女」

新おさむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「苗字のない女」

【Nコード】

N1677F

【作者名】

新おさむ

【あらすじ】

敏子は二度目の離婚をしただがその矢先に上原が事故を起こしてしまった人として敏子は上原と今でも暮らしている愛と言うより情け……

社会の底辺 もしそんな所があるとすれば 俺は 今そこに
いるのかもしれない
型枠大工 これが俺の職業 （大工さんだつてね、小説かきたいん
ですよ）

「苗字のない女」

「あつ・・・お疲れさんです 新さん 上原さんから電話ありまし
た？」

前の会社の後輩 森真介から そんな電話がかかって来たのは4月
の後半 大型連休は もうすぐ目の前だった

（いや・・・ないけど・・・何で！）

「あれ・・・もう仕事に来てないんですよ 事故 起こした見たい
で・・・」

（えっ 本当かよ・・・）

仕事終えた 上原は 買い物に行く途中に19歳の運転する原付バ
イクと接触したと言うのだ 幸いにも若者のケガは たいしたこと
はなかった

普通なら簡単に処理出来るはずの事故だが この事故は 普通では
なかった

上原は 駆けつけた警察に即座に逮捕された 肝心の車の免許を持
つていなかったからだ・・・

上原信行は 6 年程前駅の近くに 4000 万程で マンションを買った

再婚した 相手は 敏子という 敏子には 21 歳になるフリーターの長男と夜学に通う 18 歳の息子がいた 二人とも前の男の子供 敏子も一度結婚に失敗していたのだ 自己中心で 高級志向が強いわりに 生活力が全くない 上原に比べ

敏子は 働き物だった 昼間は在宅介護 夜は病院で入院患者の介護とまさに 24 時間働いていたのだ 患者が眠りにつかないと自分も眠れない 睡眠不足 疲労 ストレス

本気になって稼ごうとしない上原にたまりかねた敏子は ある日離婚を申し出た

2 通りの息子達が それを 後押し した
離婚届けを目の前にした上原は 酔った勢いで サインをしてペタリとハンを押した

やがて 離婚は正式に成立した だが離婚後も 4 人は 同じマンションに暮らしている
事故が起きたのは そんな矢先だった

6 月 21 日土曜日 その日は 朝から雨が降っていた 夜になるとその雨は激しさをましどしや降りとなっていた その夜
オレのケイタイが光った だが 番号には名前がなかった

「あつ・・・もしもし新ちゃん・・・敏子です」
その声には 聞き覚えがあった オレは何度か 上原のマンションを尋ねたことがある その声の主とも顔見知りだ そして 2 人の息子達とも

彼女は「上原敏子です」とは言わなかった「敏子です」その言葉に彼女の宿業の深さをオレは感じたもう苗字がないのだ旧姓を名乗った所でオレは知らない

「あの・・・相談したい事が あるんですけど・・・」

（何を・・・）

「上ちゃんの裁判が24日にあるんだけど 新ちゃんに証言してほしいんですよ・・・

だめかな」

（話が良くわからないけど いま何処）

「駅前だけど・・・」

電話の向こうではざわついた話声が 聞こえていた 居酒屋にでもいるのか？

（じゃー今から行きますよ）

証言・・・聞きなれない言葉に電話で話すには 限界があつた
どしゃぶりの雨の中 オレは ゆっくりとドーナツ坂を登り バスに乗り 彼女の待つ駅へと向かった

「あけみ」・・・表のカンバンには そう書かれていた 広いフロアには客の姿はなく

カウンターには くだびれたオヤジが二人背中を丸めて座っていた

誰もいない フロアのボックスに彼女と向かい合う形で 腰を降ろした

（上ちゃん 今何処のいるの？） 「横浜の拘置所」 （それ・何処にあるの？）

「上大岡の方」 （元気・・・？） 「うゝん 痩せていた 眠れないだつて ゴハンも食べていない見たい」

（何か 言っていた） 「早く・・・ここから出してよゝつて 言っていたけど・・・私に いわれてもねゝ」

（それで 証言つて・・・何を証言すればいいの・・・？）

「うん・出て来てもちゃんと仕事につける様に世話しますって事を証言してほしいの」

（そんな 事 親方に頼めばいいじゃん オレはもう会社やめた人間だし 今生きていくだけで精一杯なんだ それにそんな力なんかオレにはないよ）

「うん 親方には 頼めないよ・・・わたしひどい事言われたものの」

（何て言われたの？） 「上ちゃんは もうクビだつて たとえ出てきたつてもう使わないつて 迷惑しているのはこっちだつて 上にそう伝えろつて ものすごい怒っていた」

（それで 上ちゃんには 話したの？） 「言えないわよ・・・かわ

いそうで・・・」

「あゝあゝ やつと離婚出来た思ったのに・・・なんでこんな目に遭わなければならぬのかしら・・・もうどうしていいかわからないよ・・・」

閑散とした店内 BGM さえ流れていない 60過ぎのママが1人 作り笑顔で くたびれた 二人の男の相手をしているだけだった そんな空間の中 彼女の話聞きながら オレは静かに ジンローを飲んでいた

（オレには 自身がないんだ 上ちゃんは小学3年生位の道徳心しかないんだ わがまま過ぎるんだよ 好き嫌いで物事を判断するし 仕事を選ぶし 雨が降ったら休むし もう・・・こうなったら 仏門にでも入るしかないよ）

「ハァー」

（上ちゃんも 哲学をもたないと今の世の中生きていけないってことだよ！）

（それで 俺に証言してくれって 上ちゃんが言ったの）

「いや 弁護士さん 証言が 有るとものすごく有利だって もし仕事休めなかったら 上申書でも 良いって 言っていた・・・もう・・・新ちゃんしか頼める人いなくて・・・」

（わかった 上申書でよければ 書くよ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1677f/>

「苗字のない女」

2010年12月4日14時23分発行